

岐阜薬科大など

# 記憶力にかかわる 遺伝子の役割解明

## 精神疾患、新薬開発へ期待

学習や記憶の形成に重要な脳「海馬」に多く存在

β<sub>1</sub> (DGKβ) の欠損や減少が、記憶力の低下につながることを、岐阜薬科大(岐阜市)の原英彰教授(52)らの共同研究グループが解明した。原教授はこの遺伝子の役割を

の精神疾患に対する特効薬の開発を進めるきっかけになるかもしれない」と期待を寄せている。

研究成果は、15日付の米オンライン科学誌「PLoS ONE」に発表された。

DGKβは、神経細胞間の橋渡しを行うシナプスの後側にあるスパインと呼ばれる部分の膜に多く存在する。DGKβ自体は十数年前から知られていたが、脳機能との具体的な関連性を証明したのは初めてという。

今回の研究では、大阪大がDGKβを欠損させたマ

ウスを作り出し、このマウスを使って原教授らが記憶力や学習能力の観察や分析を行った。この結果、DGKβが欠損したマウスは、通常のマウスに比べて記憶力が約40%低下していた。

原教授によると、そう病の患者のDGKβは、傷が付いていたり、数が少なかったとする過去の研究事例があるという。このため、DGKβを活性化させる新薬を開発することで、将来的には精神疾患の治療に役立てたいとしている。